

## 年間第 18 主日の説教

金 大烈 神父 2010 年 8 月 1 日 (日)

### 《 “空しさ” を超える “希望” 》

主の平和。(主の平和)

さあ、今日の第 1 朗読(コヘレト 1・2 2・21-23)、第 2 朗読(コロサイ 3・1-5 9-11)、そして福音(ルカ 12・13-21)に共通して使っている素材は何でしょうか。第 1 朗読に書いてあるんですが、それは何でしょうか。“虚無感”、“空しさ”です。そしてその様な単語を使って言おうとするテーマは空しさを超えられる方法は何であるのかです。もっと易しい言葉で説明しますと、“要らないものに命を賭けているのか”、“要るものに命を賭けているのか”です。

今日の福音をもっと深く理解する為に、ある人物の詩を紹介させていただきます。その人は 1520 年に生まれ、1604 年に亡くなったので、日本ではたぶん‘豊臣’の時代でしょう。朝鮮の李朝時代、西山(ソサン)大師と言われた有名な僧侶です。そして多くの人々に尊敬され、この方の足跡は数多く残っているのですが、これから紹介する詩は自分の弟子達と話を聞こうと集まった信徒の群れの前で聞かせたものです。この詩を聞かせてから座ったまま、3 時間後位に亡くなったと伝わっています。本当に徳を積んだお坊さんは自分が死ぬ日、時間まで分かるみたいですよ。ですから、自分の死ぬ時が近づいた事が分かって、全ての人を集めて、遺言の様な詩を残して亡くなったのです。

訳してみましたので、ゆっくり読んでみたいと思います。

ほら、友よ！

生きているとは何だろう。

息を一回吸い込んで、その息をまた吐く事。

手に握ったり、放したり、持ったり、捨てたりする事。

それがまさに、生きている印ではないか。

そして、ある瞬間、吸った息を吐けなかったら、

それがまさに死ぬ事になるのだろう。

誰も

その代金を払うように求めない、空気の一口も

吐けなかったら

それが死に至る道である事を良く知っていながら、

どうして、あれも自分のもの、これも自分のもの

全部自分のもののように、

握ろうとする事だけするのか。

沢山持っていても、黄泉路(よみじ)には

塵一つも持って逝けない。

使うだけ使って残りは捨てなさい。

あなたが握っているのが、ある程度になったら  
あなたよりもっと欲しがると分かち合いなさい。  
人々の心の畑に、あなたの慈しみの種を蒔いて、  
人と人との心の中に、香ばしい花が咲くと  
それが天国、それが極楽である。

生というのは、一切れの浮き雲が浮かび上がる事、  
死というのは、一切れの浮き雲が消え失せる事である。  
浮き雲自体が、本来、実態が無いもの。  
生まれて死ぬ事、来て去ってしまう事も同じである。

千の考えと、万の思いが、  
燃えている火鉢の上の一点の雪  
田を耕す牛が歩くと、  
大地と天が分かれるのだ

生きる事は、一切れの雲が浮かび上がるのであり  
死ぬ事は、一切れの雲が消え失せる事である。  
死ぬ事、生きる事、来る事、行く事、  
全てがそれと同じである。

さあ、皆様はどう思われますか。人生はこのお坊さんがおっしゃったとおりだと思われるのでしょうか。そして、第1朗読のように「空しい」、「空しい」と叫ぶべきでしょうか。キリスト・イエスは  
何と教えたのでしょうか、この人生に対して。

確かにこの人生は空しいことばかりです。しかし、それで終わったら、私たちはこの様に神様を讃えながら、祈る必要はありますか。

仏教的な精神は、結構通じるところがあるのですが、カトリックの精神と少し違うところがあります。仏教では何と言いますか。「生まれる時に手ぶらで来て、死ぬ時にまた手ぶらで帰る」と言いますよね。それは正しいことかも知れません。というのは、人は誰でも生まれる時には拳を力強く握って生まれますよね。死ぬ時には 100%手を広げて死にます。それなのに色々な事を考えて、あれこれしながら、喧嘩しながら、争いながら生きる必要は無い。余ったものがあれば分かち合って欲しいというのが、仏教が教える精神的な流れです。

カトリックは何でしょうか。これだけ申し上げます。“空しい”かも知れません。しかしその“空しさ”の中で、私たちがどういう生き方をしたかによって、“待っている贈り物がある”ということ意識しなければなりません。結局、誰にでも公平に空しさを感じさせる、その世の中に私たちは生きて  
いるかも知れません。しかし、私たちカトリックの信者は、その空しさの中でもやりがいを感じなければならないことを教えています。ですので、私たちは「手ぶらで生まれて、手ぶらでかえるのでは

ありません』。元から生まれる理由があって、使命を持ってこの世に生まれます。そして、私たちの生きてきた全ての生き方をそのまま持って神様の前に行きます。絶対手ぶらで帰るではありません。

もし、皆様が誰かを憎んだら、その憎しみを持って逝きます。愛したら、その愛を持って逝きます。ですので、私たちが赦しを貰おうとすれば、この世の中で生きている内に貰わなければならないと思います。これを意識すべきだと思います。塵に帰る人生かも知れません。皆様が愛された記憶、愛された思い、愛した思い、愛した記憶、その中でこの“空しさ”を越える力を戴きます。そして何よりも、“空しい”ことではなく、私たちは“希望”、その“約束”を意識しながら、その“夢”を見ようとする心を持ち、そして、イエス様がおっしゃった、その御国をいつも期待しながら生きる人生です。ですから、ある意味で今の人生はただ過ぎてしまう人生かも知れません。しかし、ただ過ぎてしまうこの人生によって、自分の永遠の未来が定まることであるのをいつも意識しなければいけません。

イエス様はおっしゃっています。『今ここで最善を尽くしなさい』、それが、私たちが色々な空しさを乗り越えられる力ではないかと思ってみました。私はこのお坊さんのおっしゃった内容に 100%賛成します。しかしそれ以上、それを超える“希望”があることを皆様と一緒に黙想してみたいと思いました。

ありがとうございました。